



しかはま自然観察会

# のらえもん

『 人も 自然も みんな友だち 』

2025 年度

No. 1 6

2026. 2. 14~15

第 16 回活動

土呂部の冬のごちそう

今年も、土呂部にはたくさんのごちそうがありました。メイプルはもちろんのこと、雪・小川の水・葉を落とした木々・ソリのできる里山・野鳥の声・青空・シカの足跡に丸いうんち・郷土料理のしもつかれ・民宿の女将さんの元気な声、そして、なによりものらえもんのれんとくんといくこうくんの明るい顔でした。

1, 日 時：2026年2月14～15日 1泊2日

2, 天 気：二日間とも快晴 無風

1日目	12:00	10, 7℃	2日目	6:23	-4, 0℃
	17:00	5, 8℃		コタツの部屋	5, 7℃
	21:00	2, 2℃		9:30	6, 1℃
				11:15	12, 0℃

3, 場 所：栃木県日光市土呂部 標高942メートル  
宿泊：民宿水芭蕉苑 電話0278-97-1214

4, 交 通：電車とレンタカーを利用

5, 参加者：総数6 2家族 内訳 大人 3  
小学 1  
幼児 1  
スタッフ 1

6, 活動の様子

8回目の活動。

同じ活動でも、絶対に同じ内容にはならない。

それだから、毎年新しい思い出が作られる。

今回も、ハプニング続出。

新しい出来事にたくさん出会え、始めの心配はふっとんでしまった。

○電車とレンタカーで・・・

今回は、全員が電車とレンタカーを利用した。

川井くんは、7時43分発の切符を購入した。

のんびりしていた私たちは、6時21分発の電車になってしまった。

「1時間も、鬼怒川で待つのか」という思いであった。が、トイレや情報を求めて歩き回っていると、あっという間だった。

川井君が、手をふって改札口に現れた。

まずは「鬼怒太」の像の前で、記念集合写真を「パチリ！」と。

そして、レンタカーを借りに行く。

「1台お願いしているのらえもんです」

「何人ですか？」

「6人ですが、一人は4才なので、お母さんが抱っこします」

「それはダメです」

「電車は、抱っこでよかったです」

「車はダメです。それに、幼児はチャイルドシートをつけなくてはなりません」

「えっ！一人あぶれちゃう。どうしよう？」

頭の中がグルグル回る・・・。

「一人、バスで行きます」と、あわててバス停に向かった。

1015発の日光市営バス前は、たくさんの人が並んでいる。。こんな光景は、初めてだ。どの人もリュックを背負い登山靴姿。女夫淵から雪歩きを楽しんで、八丁の湯の方へ行くのだと推察できた。

900円支払い、バスに乗り込んだ。満席で、補助席が一つ空いているだけだった。とにかく、ラッキーと安堵しながら座る。が、後二人乗り込んできた。立ち席だ。すると運転手は「この先乗客があると、補助席の人は立ってもらう場合があります」とアナウンスする。「もう、乗ってくる人なんか、いないよ」と、安心して車窓を見ていた。川治温泉の「宿屋伝七」を過ぎたバス停に、一人の外人さんが立っているではないか。三人は立てない。私も補助席をしまい、立つことになった。

曲がりくねったトンネルの道と五十里ダム・川治ダムを過ぎると、日向・日陰の寂れたれた集落を走る。やがて青柳車庫に着いた。鬼怒川から、およそ1時間である。

ここはバスの中間地点であり、トイレ休憩の場所でもある。

私は、ここで下車する。「当てが、あるの？」と、運転手は心配してくれる。

周さんが、迎えに来るはずだ。

あたたかい日差しを受けてのんびり待っていると、周さんから「3分後に着きます」と連絡が入った。「けっこう、はやいじゃん」と、時計をみた。11時半。バスには、乗客が戻りはじめていた。

周さんのシルバーの車が、バス横に止まった。荷物をトランクに入れ、助手席に座る。気分よく、バスを後にした。スズキのシルバーは、快適だ。

四季の湯・黒部ダム・派出所を通過し、土呂部ダムに出る。ダムは、一面凍っている。マスの養殖場「大滝」は、昔たんぼだったという。やがて見慣れた平地に出る。民宿「水芭蕉苑」だ。女将さんが「よくきたねー」と、迎えてくれた。

### ○イタヤカエデの樹液観察

コタツの部屋で昼食。ここで食べさせてくれる好意は、とてもあたたかい。

それぞれ持参の弁当を食べ終わると、いよいよ活動開始だ。

簡易スパッツを付けるのは、靴をはく前か後か？私は、靴をはいてからスパッツをつけようとしたが、ゴムが伸びない。靴は後だった。後ろから、ゴムを靴に通すのだ。そんなことも、学びの一つだ。

今年のメイプルウオーターは、どうなのだろう？期待と不安をかかえながら、イタヤカエデの森を目指す。

赤いテープを巻いた幹が見えてきた。黒いスパイルから伸びた透明のビニール管の先には白いポリタンクが設置されている。蓋を開けてみると、樹液は三分の一ぐらい入っている。

二年ぶりに出会えた樹液。去年は、どのポリタンクも空っぽだった。

少しだけいただく。糖度を測ってみると2、0だった。試飲してみると、ほのかに甘い！イタヤカエデ自らが作り上げた純正品です。

2018年2月25日、  
その時のイタヤカエデは、  
ドリルで穴をあけるやすぐに  
大量の樹液を噴き出してくれました。  
まるで水道の蛇口をひねったように！  
噴き出した樹液を、口を開けて飲んだ  
ラッキー少年は、3年の寛太くんでした。



7年後のイタヤカエデは、どんなことを思っているのでしょうか？どのように自然環境が変わってしまったのでしょうか。私たちにできることは、あるのでしょうか。

イタヤカエデの林の中には、たくさんの鹿の足跡がありました。けもの道をつくり、所々に丸い豆のようなウンチを見つけました。

「来年も、会いに来るよ」と幹を撫でて、イタヤカエデの林を後にしました。

### ○民宿水芭蕉苑の過ごし方

「寒くなかった？」「風呂は、何時から？」と、暖かく迎えてくれるおかみさん。風呂上りにビールを一杯飲む。うまい！そのつまみに、ここで漬けた白菜を出してくれた。これがまた、適度な甘さと冷たさで、うまい！

夕食は、地元の食材をつかった料理が並ぶ。

イワナの塩焼き、日光マスの刺身、ぜんまいの煮物、ナメコの味噌汁。鉄鍋の煮物は、なんとシカ肉だった。猟師さんが分けてくれたという。それゆえ、生食は絶対にダメで、必ず火を通してといていわれているようだ。

川井くんは「うまい！」と、何杯もおかわりをする。シカ肉は、柔らかくかみごたえがある。この味噌漬けを炭火で焼いたやつも、うまいんだな～！

郷土料理「しもつかれ」を食べさせてくれた。

キャベツ・人参・大根にサケの頭をよく煮込んだものだった。サケの塩味と野菜がミックスし、冷えた体をあったかくしてくれそうだった。

調べてみると、栃木県を代表する北関東地方の伝統の郷土料理で、「正月の残りのサケの頭（悪いことを追い払う）に、節分でまいた豆（魔を滅する）の残りの大豆を使う。2月の初午の前日に作る。」とある。

郷土料理を味わいながら、大勢の家族と食事をする事のなんと贅沢なことか。そして、夜は満天の星の観察。天の川やオリオン座が、私たちを迎えてくれる。

## 7, ふり返りの感想

○ソリにのって、

したまでおりるのがたのしかった。

いちばんうえまで行って

すべれなかったのが、

かなしかった。

鹿浜五色桜小2年

○雪で、いっぱい遊びました。

かまくらづくり、やめました。

お弁当、おいしかったです。

そり、いっぱいやりました。

とても笑顔で遊びました。

2日間、東京ではできない体験を、いっぱいしました。

ソリは、最初に転んで、もうやらないと言っていましたが、

最後は、楽しくすべっていました。

寝てしまい、星空をみられなかったのが、

残念でした。

母

ゆきやまで いっぱい遊んだ そりすべり

谷在家保育園

○イタヤカエデの樹液は、

年々量が少なくなっていると感じました。

雪も、去年と比べて少なく、

重く硬い雪だが、

場所によってはサラサラでした。

夕飯の鹿鍋が、めっちゃうまかった。

鹿鍋や 満ちたる腹に 酔い心地

HAL 東京2年

○あったかい日差しの中かのソリ滑りころんではころんでわざところんで

古高 利男